故郷(2)

「一、二日休んだら、親戚廻りをしてね、そのうえで発とうとしよう」
と母は言った。
「ええ」
「それから、閏土ね。あれが、いつも家へ来るたびに、おまえの噂をしては、しきりに会いたがっていましたよ。おまえが着くおよその日取りは知らせておいたから、いまに来るかもしれない」

このとき突然、私の脳裡に①不思議な画面がくりひろげられた――紺碧の空に金色の丸い月がかかっている。その下は海辺の砂地で、見わたすかぎり緑の西瓜がうわっている。そのまん中に十一、二歳の少年が、②銀の首輪をつるし、鉄の※刺叉を手にして立っている。そして一匹の「※猹」を目がけて、ヤッとばかり突く。すると「猹」は、ひらりと身をかわして、かれの股をくぐって逃げてしまう。

この少年が閏土である。かれと知りあったとき、私もまだ十歳そこそこだった。もう三十年近い昔のことである。そのころは、父もまだ生きていたし、家の暮らし向きも楽で、私は坊っちゃんでいられた。ちょうどその年は、わが家が大祭の当番にあたっていた。この祭の当番というのが、三十何年目にただ一回順番が廻ってくるとかで、ごく大切な行事だった。正月に、祖先の像を祭るのである。さまざまの供物をささげ、祭器もよく吟味するし、参詣の人も多かったので、祭器をとられぬように番をする必要があった。私の家には「忙月」がひとりいるだけである（私の郷里では、雇い人は三種類ある。年間とおして決った家で働くのが「長年」、日ぎめで働くのが「短工」、自分でも耕作するかたわら、年末や※節季や年貢集めのときなどに、決った家へ来て働くのが「忙月」とよばれた）。ひとりでは手が足りぬので、かれは自分の息子の閏土に祭器の番をさせたいが、と私の父に申し出た。父はそれを許した。私もうれしかった。というのは、かねて閏土という名は耳にしていたし、おなじ年ごろなこと、また※閏月の生まれで、※五行の土が欠けているので父親が閏土と名づけたことも承知していたから。かれは罠をかけて小鳥を取るのがうまかった。

それからというもの、来る日も来る日も新年が待ちどおしかった。新年になれば閏土がやってくる。待ちに待った年末になり、ある日のこと、母が私に、閏土が来たと知らせてくれた。飛んでいってみると、かれは台所にいた。つやのいい丸顔で、小さな毛織りの帽子をかぶり、キラキラ光る銀の首輪をはめていた。それは父親の溺愛ぶりを示すもので、どうか息子が死なないようにと神仏に願をかけて、その首輪でつなぎとめてあるのだ。かれは人見知りだったが、私にだけは平気で、そばに誰もいないとよく口をきいた。半日もせずに私たちは仲よくなった。

（竹内好訳『魯迅文集Ⅰ』筑摩書房　所収「故郷」による。一部表記を変えた箇所がある）

※刺叉…柄の先に二股に分かれた金具を付けた武器。
猹…アナグマに似た動物とされる。猹は魯迅の造字。　節季…決算期。普通、盆と暮れ。
閏月…旧暦は一年が三百五十四日であり、そのままでは季節とのずれが生じていく。このため、数年おきに一年を十三か月とし、ある月を繰り返してずれを修正する。この月を閏月という。
五行の～…古代中国で万物のもととなると考えられた五つの元素（木・火・土・金・水）を五行という。中国では生まれた年・月・日・時の四つに干支を当てはめる風習があり、ここでは閏土の生まれた年月日時には、土に属する干支がないということ。

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ——線①「不思議な画面」が具体的にえがかれている箇所(かしょ)の最初と最後の三字を答えなさい。ただし句読点も字数に含(ふく)む。

□□□～□□□

(2) ——線②「銀の首輪」について、次の解答欄(かいとうらん)に当てはまる言葉を、本文中から書きぬきなさい。

銀の首輪は、閏土の父親が、息子が死なないよう願ってつけさせているもので、

□□□□□□□を示すものである。

(3) 「私」と閏土について誤って述べたものを選びなさい。

ア 「私」が閏土と出会ったのは三十年ほど前で、そのころの「私」の家は経済的に余裕(よゆう)があった。

イ 閏土は大祭の当番にあたる家の息子で、正月になると祭器をとられないために番をしていた。

ウ 二人は同じ年ごろで、年末のある日にはじめて出会うと、半日もせずに仲よくなった。

〔　　〕

(4) 本文について正しく述べたものを選びなさい。

ア 本文では、母の言葉をきっかけに、「私」が閏土と出会ったころのことについて回想がはじまる。

イ 本文では、過去の母との対話の回想から、現在の場面にもどって「私」の家の新年の様子がえがかれる。

ウ 本文では、「私」の少年時代の回想のあと、現在の場面にもどって閏土との出会いがえがかれる。

〔　　〕